

案件番号  
02-C20

## 遠隔見守りシステムの在宅介護事業者と利用者家族による評価調査

見守り支援

まもる~のHOME

### 機器の概要

#### センサーが利用者の状態を的確にとらえ離れた場所の家族や介護スタッフに通知

「まもる~のHOME」は、“睡眠状況の把握”をキーワードとした新しい在宅介護向けのクラウド型見守りシステム。ベッドのマットレス下に設置したセンサーにより、離れて暮らす家族や、利用している介護施設のスタッフでも、利用者の睡眠・離床、部屋の環境をリアルタイムに知ることができる。

まもる~のセンサーでは、利用者の状態だけでなく、部屋の温度・湿度・照度、睡眠レベル状態を把握することができ、生活傾向がひと目でわかる。また、

これらの状態変化をアラート通知することで、利用者と家族に大きな安心を提供する。



センサー本体とクラウド通信イメージ

### モニター調査の概要

#### 在宅介護サービス利用者の居宅に機器を設置見守る家族と施設スタッフが総合的な評価

##### ◆調査概要

- 在宅介護サービス利用者を対象とする。
- 介護事業者と利用者家族に「まもる~のHOME」を利用していただき、介護事業者と家族の双方の視点で在宅時の被介護者の日常を観察。「安否確認」、「業務の効率化」ならびに「ライフログ(睡眠データや居室環境)に基づく生活改善」に対する有用性を評価する。

##### ◆主な評価項目

- 機器の有用性:不安の改善、生活の改善、業務の効率化
- 機器の使い勝手:ITリテラシー調査、ユーザビリティ評価、満足度調査

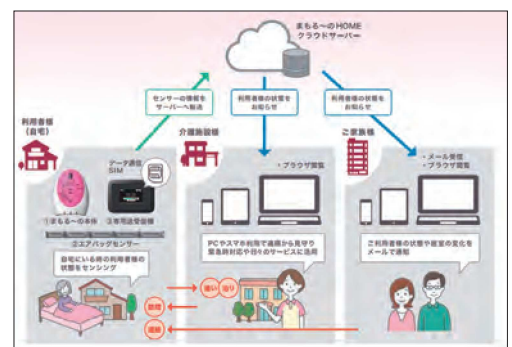
##### ◆被験者

- 認知症を有する高齢者4名とその家族4名 計8名
- 小規模多機能事業所の職員10名

##### ◆実施手順

- ①小規模多機能ホーム「あたがわ」に協力をいただき、モニターを募集。
- ②「あたがわ」の職員に対するシステム活用研修会を実施。
- ③職員ならびに利用者家族に対するITリテラシーや見守りに対する意識調査を実施。

- ④介護サービス利用者4名の居宅に「まもる~のHOME」を設置(2020年11月)。
- ⑤職員が利用者のライフログレポートを作成(2020年12月、2021年1月)し、利用者家族と情報共有。
- ⑥モニター完了後、職員および利用者家族に対して満足度調査、ユーザビリティ評価などのアンケートやヒアリングなど調査を実施。



全体システム構成



機器の設置状態

株式会社まもる一の

事業本部

〒102-0025 東京都千代田区神田佐久間町4-16  
 パルク2ビル3F

Tel: (03)5817-8767

HP: <https://mamoruno.miel.care/>

■有限会社ケアシェルパ

小規模多機能ホーム あたがわ

モニター調査の結果

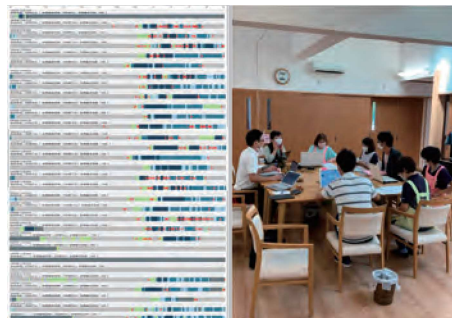
データから見える利用者の様子が見守る人に大きな安心を与える

- 自宅での生活パターンが見えるようになったことで、業務の無駄を減らすことができた。具体的には、自己申告の情報とモニタリングの情報では就寝・起床時間が異なることがわかった。朝の送迎時には、まだ利用者が寝ていることもあったが、リアルタイム表示による職員の待機時間の解消や、利用者の生活リズム改善の促しにつながられた。
- 居室の夜間の室温を把握することができるので、スタッフ間で室温について情報共有ができるようになった。配食・服薬の訪問時に室温を調整することで一定に保つことができた。頻尿により夜間覚醒が多い利用者があることもわかったので、室温による改善やパッドの改善の検討につながった。
- 利用者家族へのアンケートを実施したところ、遠隔見守りの必要性に関しては利用前と利用後で50%→100%へと意識の変容がみられた。関係者（成年後見人）からはモニター終了後も継続してほしいという声が上がった。
- 見守りを行なう利用者家族が比較的高齢（40代1名、60代1名、70代2名）であったため、スマホや

アプリの利用に慣れておらず、また職員もPCやタブレットの操作に慣れていないため、安定稼働や操作の慣れに時間がかかった。導入のハードルを下げるために、ユーザーフレンドリーな設計に関して一層の改善をすべきということがわかった。



利用者の情報表示画面例



累積睡眠データ例と睡眠傾向の分析会議の様子

モニター調査協力施設の声

今後ますます増える在宅介護に大変有益な機器さらに使い方を工夫していきたい

- モニター調査参加者を募るために利用者家族に対して募集案内を送付したが、在宅見守りシステムに対する一般的な認知度が低く、家族に理解いただくのに苦労した。
- モニター調査実施中、月末ごとにライフログレポートを家族に送付したところ、家族から「認知症のこともあり、離れていると様子かわからず心配だが、今回睡眠データにより確かに寝ていること、外出している日のことなどがわかって安心感があった」という声をいただいた。
- 担当者会議に参加して睡眠評価レポートを共有したところ、地域包括支援センターからこの取り組みに対する評価を得られたのが収穫だった。在宅介護が容易ではない

■有限会社ケアシェルパ

小規模多機能ホーム あたがわ 佐鳥 和樹

地域ではあるが、今後も継続してほしいという要望があった。

- 想像以上に夜間の室温が下がっているなど、室内環境を可視化するメリットを発見した。室温をコントロールすることによるヒートショックの防止や頻尿による夜間覚醒の抑制につながれる可能性を感じている。



小規模多機能ホーム「あたがわ」佐鳥氏（左）とスタッフの皆さん